

## はしがき

本書は、国際日本文化研究センターが海外に公募し、フランス国立社会科学高等研究院（パリ）よりオギュスタン・ベルク教授を迎え、2005年度に行った、第二次大戦後、とりわけ高度経済成長期以降、すなわち今日の日本における「住まい」の状況を焦点にすえた共同研究「日本における住まいの風土性・持続性」の報告書である。

標題における「住まい」は、自然環境、社会環境との関係をふくめた概念として用いられている。今日の日本語「住まい」は、主として個人や家族の住宅の仕様を指しているが、その通念とはかなり意味内容がことなり、「住環境」とでもいうべきものを指している。しかし、フランス語“habitation”の訳語としては「住まい」が一般化しており、また人が「住まう」とは、そもそも自然、社会環境と関係をもつものであるという考えに立って、あえて「住まい」を用いていることを了解されたい。

今日、日本国内でさまざまな分野で住環境問題と取りくんでおられる研究員の方がたの報告と協力によって、六回の共同研究会が開催され、そして、その報告を中心に本書は構成されている。研究代表者、オギュスタン・ベルク教授ならびに共同研究に参加して下さった各位に感謝したい。

2007年5月

公募共同研究「日本における住まいの風土性・持続性」幹事

国際日本文化研究センター教授

鈴木 貞美